

[A年] 公現後第7主日(2025年2月23日)

【旧約聖書日課】列王記下 5章1~14 (15~19a) 節

1アラムの王の軍司令官ナアマンは、主君に重んじられ、気に入られていた。主がかつて彼を用いてアラムに勝利を与えられたからである。この人は勇士であったが、重い皮膚病を患っていた。2アラムがかつて部隊を編成して出動したとき、彼らはイスラエルの地から一人の少女を捕虜として連れて来て、ナアマンの妻の召し使いにしていた。3少女は女主人に言った。「御主人様がサムリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえますように。」4ナアマンが主君のもとに行き、「イスラエルの地から来た娘がこのように言っています」と伝えると、5アラムの王は言った。「行くがよい。わたしもイスラエルの王に手紙を送ろう。」こうしてナアマンは銀十キカル、金六千シケル、着替の服十着を携えて出かけた。6彼はイスラエルの王に手紙を持って行った。そこには、こうしたためられていた。

「今、この手紙をお届けするとともに、家臣ナアマンを送り、あなたに託します。彼の重い皮膚病をいやしてくださいますように。」7イスラエルの王はこの手紙を読むと、衣を裂いて言った。「わたしが人を殺したり生かしたりする神だとも言うのか。この人は皮膚病の男を送りつけていやせと言う。よく考えてみよ。彼はわたしに言いがかりをつけようとしているのだ。」8神の人エリシャはイスラエルの王が衣を裂いたことを聞き、王のもとに人を遣わして言った。「なぜあなたは衣を裂いたりしたのですか。その男をわたしのところによこしてください。彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」

9ナアマンは数頭の馬と共に戦車に乗ってエリシャの家に来て、その入り口に立った。10エリシャは使いの者をやってこう言わせた。「ヨルダン川に行つて七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」11ナアマンは怒ってそこを去り、こう言った。

「彼が自ら出て来て、わたしの前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病をいやしてくれるものと思っていた。12イスラエルのどの流れの水よりもダマスコの川アバナやバルバルの方が良いではないか。これらの川で洗って清くなれないというのか。」彼は身を翻して、憤慨しながら去って行った。13しかし、彼の家来たちが近づいて来ていきめた。「わが父よ、あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそれとおりなさいにちがひありません。あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか。」14ナアマンは神の人の言葉どおりに下って行って、ヨルダンに七度身を浸した。彼の体は元に戻り、小さい子供の体のようになり、清くなった。

15彼は随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立った。「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。今この僕からの贈り物をお受け取りください。」16神の人は、「わたしの仕えている主は生きておられる。わたしは受け取らない」と辞退した。ナアマンは彼に強いて受け取らせようとしたが、彼は断った。17ナアマンは言った。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこの僕にください。僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをさきげることにはしません。18ただし、この事については主が僕を救ってくださいますように。わたしの主君がリモンの神殿で行つてひれ伏すとき、わたしは介添えをさせられます。そのとき、わたしもリモンの神殿でひれ伏さねばなりません。わたし

がリモンの神殿でひれ伏すとき、主がその事についてこの僕を救ってくださいますように。」19エリシャは彼に、「安心して行きなさい」と言った。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 12章1~10節

1わたしは誇らざにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。2わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じます。3わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じます。4彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。5このような人のことをわたしは誇りました。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。6仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、7また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。8この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。9すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りました。10それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

【福音書日課】マタイによる福音書 15章21~31節

21イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。22すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。23しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」24イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。25しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。26イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけません」とお答えになると、27女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」28そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

29イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。30大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。31群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記下5章1～14(15～19)節

¹アラムの王の將軍ナアマンは、主君に重んじられ、
氣に入られていた。主が彼によってアラムに勝利を与え
られたからである。ただ、この人は力ある勇士であった
が、規定の病を患っていた。

²かつてアラムは部隊(別訳→略奪隊)を組んで出撃
したとき、イスラエルの地から一人の少女を捕虜として
連れて来た。彼女はナアマンの妻に仕えていたが、³ある
とき、女主人にこう言った。「ああ、ご主人様がサマ
リアにいる預言者のところにお出でになれば、その規定
の病を癒してもらえますでしょうに。」⁴そこで、ナアマン
は主君のもとに行って、「イスラエルの地から来た若い
女が、このようなことを申しております」と伝えた。⁵ア
ラムの王は、「行って来なさい。私もイスラエルの王に
手紙を送ろう」と答えた。ナアマンは、銀十キカル、金
六千シェケル、着替え十着を手にして出かけた。⁶彼は
イスラエルの王への次のような手紙を携えて行った。
「さて、この手紙をお手元に届けますと同時に、家臣ナ
アマンを御前に遣わします。彼の規定の病を癒してくだ
さいますように。」⁷イスラエルの王はこの手紙を読む
や、衣を引き裂いて言った。「私は、人を殺したり生か
したりする神なのか。この者は、私に規定の病の男を癒
せと送って来ている。だが、よく考えてみよ。彼は私に
言いがかりをつけようとしているのだ。」

⁸神の人エリシャは、イスラエルの王が衣を引き裂い
たことを聞くと、王に人を送って言った。「なぜ、あな
たは衣を引き裂いたりしたのですか。その男を私のとこ
ろによこしてください。そうすれば、イスラエルに預言
者がいることが分かります。」⁹ナアマンは馬と戦
車でやって来て、エリシャの家の戸口に現れた。¹⁰エリ
シャは、使いの者をやって、「ヨルダン川に行って、七
度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、
清くなるでしょう」と言わせた。¹¹ところが、ナアマン
は怒って立ち去り、こう言った。「私は、彼が自ら出て
来て私の前に現れ、彼の神、主の名を呼んで、患部に手
をかざし、病を癒すものばかり思っていたのだ。」¹²ダ
マスコの川であるアパナヤバルバルのほうで、イスラ
エルのどんな水よりも良いではないか。それなのに、これ
らの川で洗っても、清くなれないというのか。」ナア
マンは身を翻して、憤って立ち去った。¹³しかし、家臣
たちがそばに来て進言した。「ご主君(直訳→わが父)、
あの預言者が大それたことを命じたとしても、あなたは
きっとそれをなされたことでしょう。ましてあの方は、
『身を洗って清くなれ』と言っただけではありません
か。」¹⁴そこで、ナアマンは下って行って、神の人の言
葉どおり、ヨルダンに七度身を浸した。すると、その体
は、少年の体のようになり清くなった。

¹⁵ナアマンは、陣營の營と一緒に神の人のところに戻
り、その前に現れて言った。「イスラエルのほか、全地
のどこにも神はおられないということが分かりました。
さあどうか、僕からの贈り物をお受け取りください。」
¹⁶しかし、神の人は、「私が仕える主は生きておられる。
私は受け取りません」と答えた。ナアマンはしきりに受
け取らせようとしたが、エリシャは断った。¹⁷そこで、
ナアマンは言った。「それでは、どうか僕に二頭のらば
に載せるほどの土をください。僕は、主以外のほかの
神々には、もはや焼き尽くすいけにえや会食のいけに
えを献げることはいたしません。¹⁸ただ、次のことにつ
いては、お教しくさせていただきますように。私の主君が、礼拝を

するためにリモンの神殿に入るとき、私の介添えが必要
となるため、私もリモンの神殿で礼拝します。私がリモ
ンの神殿で礼拝するとき、主がこのことについて、僕を
お教しくさせていただきますように。」¹⁹エリシャがナアマンに、
「安心して行きなさい」と言ったので、ナアマンは彼と
別れて、少し道を進んだ。

コリントの信徒への手紙二12章1～10節

¹私は誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主
の幻と啓示とについて語りましょう。²私は、キリスト
にある一人の人を知っています。その人は十四年前、第
三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体
の外に出てかは知りません。神がご存じです。³私はその
ような人を知っています。体のままか、体を離れてかは
知りません。神がご存じです。⁴その人は樂園にまで引
き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表し
ない言葉を聞いたのです。⁵このような人のことを私は
誇りましょう。しかし、私自身については、弱さ以外は
誇るつもりはありません。⁶もっとも、私が誇る気にな
ったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはなら
ないでしょう。しかし、誇るのはやめましょう。私につ
いて見たり、聞いたりする以上に、私を買いかぶる人が
いるかもしれないからです。⁷また、あまりに多くの啓示
を受けたため、それで思い上がることのないようにと、
私の体に一つの棘が与えられました。それは、思い上が
らないように、私を打つために、サタンから送られた使
いです。⁸この使いについて、離れ去らせてくださるよ
うに、私は三度主に願いました。⁹ところが主は、「私の
恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れ
るのだ」と言われました。だから、キリストの力が私に
宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りま
しょう。¹⁰それゆえ、私は弱さ、侮辱、困窮、迫害、行き
詰まりの中にあっても、キリストのために喜んでいま
す。なぜなら、私は、弱いときにこそ強いからです。

マタイによる福音書15章21～31節

²¹イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に退
かれた。²²すると、この地方に生まれたカナン²³の女が
出て来て、「主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください。
娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。²³し
かし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで弟子
たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってくだ
さい。叫びながら付いて来ます。」²⁴イエスは、「私は、
イスラエルの家の失われた羊のところ²⁵にしか遣わされ
ていない」とお答えになった。²⁵しかし、女は来て、イ
エスの前にひれ伏し、「主よ、私をお助けください」と
言った。²⁶イエスが、「子どもたちのパンを取って、小
犬たち投げてやるのはよくない」とお答えになると、²⁷
女は言った。「主よ、ごもっともです。でも、小犬も主
人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」²⁸そこで、
イエスはお答えになった。「女よ、あなたの信仰は立派
だ(直訳→大きい)。あなたの願いどおりになるように。」
その時、娘の病氣は癒された。

²⁹イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行き、
それから、山に登って座っておられた。³⁰大勢の群衆が、
足の不自由な人、目の見えない人、手の不自由な人、口
の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエス
の足元に置いたので、イエスはこれらの人々を癒された。
³¹群衆は、口の利けない人がものを言い、手の不自由な
人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見
えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を崇め
た。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月23日「公現後第7主日」の日課主題は「いやすキリスト」。

・旧約聖書日課は、「列王記下」から、アラムの司令官ナアマンの皮膚病が癒されたというエリシャ伝承の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、パウロが自身の啓示体験と弱さの信仰を告白する箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、主イエスがカナンの女の娘を癒された説話と続く箇所。

旧約日課(列王記下5章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」全四巻の最終巻。ダビデから王位を継承したソロモン王以後のユダ・イスラエル王国時代を両王国滅亡まで物語る歴史物語文書。全般的には「王国年代記」の形式で叙述されながら、一部に「預言者伝承物語」が挿入される構成となっている。

・「列王記」の「預言者伝承物語」は、上巻を中心に展開する「エリヤ伝承物語」と下巻を中心に展開する「エリシャ伝承物語」に大別されるが、両伝承物語は「列王記」中では両預言者が師弟関係にあったという記述(上 19:15~21、下 2:1~18)により接続されている。この接続は、伝説的な預言者「エリヤ」の権威を「エリシャ」に継承付与させるものであるが、これを除いて両預言者が同時に描かれる説話は見当たらず、実際にはそれぞれの「伝承物語」が独立して成立し、受け継がれていたものと考えられる。

・「列王記」全体の構成において、これらの「預言者伝承物語」は、北王国イスラエルを舞台にオムリ王朝期(前 876~842年頃)の政治抗争を背景として展開されている。特に「エリシャ」は、オムリ王朝を打倒して新たに起こされたイェフ王朝(前 842~746年頃)の事実上の立役者として描かれており、「預言者伝承物語」自体が「イェフ王朝成立物語」に位置づけられている。つまり、「エリヤ~エリシャ」を祖とする預言者集団(≒諸々の地方聖所祭司集団)こそがイェフ王朝存立に欠かせない権力基盤であったとする史観に基づいて構成されているのである。

・日課箇所は、「エリシャ伝承物語」の中で集中的にまとめられた奇跡伝承集(下 4~6章)の中の一つで、北王国イスラエルとは隣国として対立関係にあったアラム・ダマスコ王国の軍司令官ナアマンが、自身の皮膚病治癒を求めて「イスラエルの預言者」として知られたエリシャのもとを訪ねたという伝承説話である。アラム・ダマスコ王国とイスラエル王国との間の紛争は、列王記上 20章、同 22章、同下 6~7章に記述がある。他方、同下 8章には、エリシャが病気のアラム王に「神の人」として迎えられるのみならず、その王の暗殺に関与したという叙述がある。おそらくエリシャら地方聖所に拠点を置く預言者らは、いずれの世俗の王権からも独立した権力基盤を有していたのだろう。

・ナアマンの癒しを物語る日課箇所は一般に、異教リモン神を祀るアラム王国の軍司令官が癒しの奇跡を通してイスラエルの神に帰依した逸話として解される。他方で、「エリシャ伝承物語」全体の中で展開されるイスラエルとアラムの紛争の叙述を踏まえれば、エリシャがアラム王国の軍司令官を籠絡して通じ合い、アラム王国に対する影響力を確保することを通して、イスラエル・オムリ王朝打倒に向けた策略を弄していたことを意味する逸話とも解される。おそらく、本来は後者の位置づけであった逸話が、正典編纂過程でより前者に比重を置いた叙述で物語られるようになってきたのであろう。

使徒書日課(Ⅱコリント 12章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。パウロが、マケドニア伝道の後に辿り着いたコリントでローマの教会共同体出身者らと協力して形成した教会共同体に宛てて著した一連の書簡の一つとされる。新約学者の中には、本書を複数の書簡をまとめた文書と解し、8~9章などを本来の書簡と区別して解する者もある。

・パウロは、コリントの教会に対して自らが指導的立場にある者の一人であるという自覚を持っていたと考えられるが、コリントの教会には、ケファ(ペトロ)やアポロなど他の指導者を重んじる者もおり、共同体内の対立や混乱などがあつたと推認される。これを伝え聞いたパウロは、調停的で普遍性のある救済理解に基づいてではあるが、自身への批判と受けとめたことに応ずるようにして、きわめて指導的な立ち位置から「手紙一」を著し送ったため、却って同教会共同体の人々との関係に深い溝を生じさせてしまうことになってしまっていた。それに対して(おそらく紆余曲折を経て)、パウロ自身が歩み寄り形で和解し、関係の回復を図ろうと模索する中で書き送ったのが本書簡である。

・「手紙一」の中でも、パウロは自らの「誇り」について言及している箇所がある(Ⅰコリ 9章、15:31など)。同時にパウロは、繰り返し「(キリスト以外のものを)誇ってはいけない」ということを述べてもいる(Ⅰコリ 1:29,31、3:21、4:7、5:6、13:3など)。この二重基準とも言われかねない「誇り」の扱いが、「手紙二」では調整され、自身についても読み手についても一定程度公平な扱いで取り上げられるようになっている。「誇り」(☑カウカオマイ/☒カウケーマ/☒カウケーシス)は、「パウロ書簡集」で広く用例が見られるが、特に両「コリントの使徒への手紙」で多く見られ、パウロとコリントの教会メンバーとの間の問題の背景にあつて実のところ重要な主題となっていることがわかる。この用語と組み合わせで繰り返し出てくるのが、「弱さ」(☒アステネイア/☒アステネオー)と訳される語で、日課箇所でも、「弱さを誇る」ことへと方向付ける言説が展開されている。その背景には、当然「弱さ」ではなく「強さ」を「誇る」者であったという過去の自己認識があつたのであり、ここにパウロの「回心」の要諦がある。

福音書日課(マタイ 15 章より)

・日課箇所は、主イエスがフェニキア地方を訪れた際にカナンの子を癒したことを伝える説話とそれに続く箇所。カナンの子を巡る説話は、「マルコ福音書」が並行記事を伝えている。両福音書の記述に大きな差はないが、子の出自について、「マタイ」が「この地に生まれたカナンの子」としているのに対して、「マルコ」は「ギリシア人でシリア・フェニキアの生まれ」(マルコ 7:26)としている。場面設定されている「ティルスとシドンの地方」とは、現在の「レバノン」に相当するフェニキア人の都市国家で知られる地方で、「ティルス」も「シドン」も旧約で繰り返し登場してくる都市国家。この両都市に加えて「ビュブロス」などの都市も古来知られているが、この地方の人々は自身を「カナン人」と称しており、「フェニキア」の呼称はギリシア人によるもの。「マルコ」が「シリア・フェニキア」としているのは、この地方がローマ帝国時代、「シリア属州」に属していたことによると推察される。それに対して、「マタイ」が置き換えた「カナン」の用語は、新約正典中で他には「使徒言行録」で 2 例があるのみで、一般的ではない。旧約正典で多用される「カナン」を敢えて用いることで、この説話を旧約の伝える伝承説話と結びつけようという意図しているとも考えられる。たとえば、「列王記上」17 章に伝えられる、「預言者エリヤ」が「シドン・サレプタのやもめ」を助けた説話伝承など。

・主イエスがユダヤ人ではない異邦人と接触したことを伝える伝承は多くないが、特にユダヤ・ガリラヤ地方以外の地に赴いての出来事を物語る伝承は限られる。この逸話伝承のほかには、「デカポリス地方」を巡られたことが短く伝えられている例(マルコ 5:20)があるのみ。日課箇所は、主イエスが異邦人への積極的な宣教活動をされていなかった理由を主イエスご自身に語らせており、初代教会での認識もそのとおりであったのだろう。にもかかわらず、日課箇所が「ティルスとシドンの地方」に赴かれて「カナンの子」と接触した主イエスの逸話を伝えるのは、主イエス自身がユダヤ人ではない者への宣教を拒んでいたわけではないことを示すためなのだろう。特に「マタイ福音書」は、「異邦人」を教会に受け入れることに強く関心を示している(12:15~21 など)。この箇所も、異邦人受け入れを教会に促す意図で置かれている。18:17 の記述も、異邦人排除の意味ではなく、異邦人に対する特段の寛容な対応を意味していると解される。

来週の誕生日 (2月23日~3月1日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-363「み神の力は」は、18 世紀前半の代表的な英語讃美歌作家 I.ウォッツが子どものための讃美歌集(1715 年)のために作詞したものに、V.ウィリアムズが紹介したイギリス民謡曲を組み合わせたもの。

- ・21-451「くすしきみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる。作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。
- ・21-529「主よ、わが身を」(= I 333)は、19 世紀スコットランド長老教会牧師ジョージ・マセソンが「キリスト者の自由」と題して作詞発表したものだが、現代の英語讃美歌での採用は皆無。曲は 19 世紀英国の音楽家マーティンの作曲。

21-363「み神の力は」

I Sing the Almighty Power of God

1. We sing the mighty power of God / that made the mountains rise, / that spread the flowing seas abroad / and built the lofty skies. / We sing the wisdom that ordained / the sun to rule the day; / the moon shines full at his command, / and all the stars obey.
2. We sing the goodness of the Lord / that filled the earth with food; / he formed the creatures with his word / and then pronounced them good. / Lord, how your wonders are displayed, / where'er we turn our eyes, / if we survey the ground we tread / or gaze upon the skies.
3. There's not a plant or flower below / but makes your glories known, / and clouds arise and tempests blow / by order from your throne; / while all that borrows life from you / is ever in your care, / and everywhere that we can be, / you, God, are present there.

21-451「くすしきみ恵み」= II-167

Amazing Grace! How Sweet the Sound

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.

21-529「主よ、わが身を」

Make Me a Captive, Lord

1. Make me a captive, Lord, / and then I shall be free. / Force me to render up my sword, / and I shall conqueror be. / I sink in life's alarms / when by myself I stand; / imprison me within thine arms, / and strong shall be my hand.
2. My heart is weak and poor / until it master find; / it has no spring of action sure, / it varies with the wind. / It cannot freely move / till thou hast wrought its chain; / enslave it with thy matchless love, / and deathless it shall reign.
3. My power is faint and low / till I have learned to serve; / it lacks the needed fire to glow, / it lacks the breeze to nerve. / It cannot drive the world / until itself be driven; / its flag can only be unfurled / when thou shalt breathe from heaven.
4. My will is not my own / till thou hast made it thine; / if it would reach a monarch's throne, / it must its crown resign. / It only stands unbent / amid the clashing strife, / when on thy bosom it has leant, / and found in thee its life.